
ヒメゴト

アサルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒメゴト

【Nコード】

N3187Q

【作者名】

アサルト

【あらすじ】

これはとある日の秘め事。

好きな人がいます。

側にいたい。

支え合いたい。

共に在りたい。

そんな人がいます。

伝えたい想いがあります。

この想いを伝えたい。

この気持ちを知って欲しい。

そして受け入れて欲しい。

そんな想いがあります。

あなたを想うと強くなれる。

あなたを想うと優しくなれる。

あなたを想うと自分が好きになれる。

あなたを想うと切なくて、痛くて、落ち着かなくて。

あなたを想うと幸せで、嬉しくて、暖かくて。

これは多分、『恋』という感情。

あなたが恋しい。

あなたが愛おしい。

どうしようもなく、あなたが……。

好きになっていいですか？

好きでいてもいいですか？

好きだと言って　いいですか？

×

×

×

ヒメゴト

朝。人間に限らず、多くの生命が活動を開始するそんな時間。

住宅街に面した歩道をゆっくりと歩く女性の姿があった。

長くつややかな黒い髪を腰の辺りまでのばし、潤んだ黒い瞳はどこかのんびりとした穏やかな色をたたえている。細身で女性としてはやや長身だが、威圧感はあるでない。

楠瀬くすのせハルカ。

二十二歳の大学四回生。

昨今の女子大学生といえば化粧や染髪など珍しくもないが、彼女はそういった手をほとんど加えていない。無頓着な訳ではない。髪の色も瞳の色も、これが自分に一番似合っていると自他共に認めているからだ。

その容姿は穏やかな物腰と相まって、大和撫子と呼ばれることも多い。

決して派手な美人ではないが、道ですれ違えば思わず目で追ってしまう、そんな野に咲く花の様な印象の娘だ。

「はあ」

吐く息が白い。季節は冬。そろそろ厚手のコートを用意した方が良さだろうかと考えていると、ハルカは目的地にたどり着いた。

アパートだ。部屋数は二階も含めて四部屋しかない小さな貸しアパート。

正確にはその一 一号室に彼女は用がある。

左腕に巻いた腕時計を見れば時刻は八時半を指している。ここからハルカの通う大学までは歩いて約十分。一時間目の講義を受けようと思えば、まだ少し余裕がある。部屋の住人が学校に通う意思があればもう起きているはずだ。

「アサト、起きていますか？」

ハルカが部屋に向けて声をかけるが、返事はない。ちなみに呼び鈴はあるが鳴らさない。うるさいから使うなと言われている。ドアの取っ手を回すと鍵はかかっておらず、ガチャリと控えめな音を立てて開かれた。

「不用心ですねえ」

そう言いながら部屋に入る。キッチンと一体化している、廊下とも呼べない短い通路を進むとすぐに居間がある。男の独り暮らしにしては整頓されており、汚いという印象は無い。多分に部屋の主の性格が反映されているとハルカはここに来る度に思う。

そして部屋の主の姿を視界にとらえる。ベッドでも布団でもなく、折り畳み式のソファに寝そべっている青年の姿を。

青年の名前は神宮寺アサト。

ハルカより2つ年下の二十歳。

彼女と同じ大学に通う二回生。

中途半端に伸ばした黒髪。今は閉じられている瞳の色も黒い。体格はやや痩せ気味で身長はハルカと同じくらいだ。美形という訳ではないが、そこそこ整った容姿をしている。

面倒くさがりのくせに几帳面。他人に無関心なくせに、世話焼きな所もある。色々と矛盾を抱えた性格の青年　というのがハルカ

の
見
解
だ。

「アサト、もう起きないと、講義に遅刻しますよ？」

ハルカが青年 アサトに声をかける。が、起きる素振りは無い。

嘆息して、アサトの傍らかたわに座り、彼の寝顔に見入る。

「……………」

まだどこか少年の面影を残した、大人になりきれていない顔立ち。

そんな彼の無防備な姿に、ハルカは鼓動が高まるのを感じる。

好きだから。

大好きだから。

「 ねえ、アサト……………」

呼吸をする度にアサトの口から吐息が漏れる。

「わたしは……………あなたが……………」

ハルカの意識がアサトの唇に集中する。

「あなたのことが」

ぐっと顔を近づける。彼の唇に、自分のそれを重ねる様に。

しかし

「……こういうのは反側ですね」

ハルカはアサトの唇ではなく、右の頬ほおに軽く口づけをした。

「でも、次はありませんよ?」

ささやく様に言ってから、もう一度彼の寝顔に見入る。

胸が痛んだ。

彼に対する罪悪感と、自に分対する嫌悪感で、心が締め付けられる。

自分の望む未来など、実現出来る訳がない。

これは叶う事のない恋だ。

そう思うと、言い様のない恐怖に襲われる。

どうしようもなく自分がみじめな存在に感じてしまう。

怖い。

何もかもが　世界の全てが自分に悪意を持っている様で。

身体が震えるのを押さえられない。

「……アサト……わたしは……」

神宮寺アサトは、部屋に誰かが入ってくるのは判っていた。おかた楠瀬ハルカだろう。こうしてアサトを起こしに来るのは、もう彼女の日課になっている。部屋の鍵をかけずに寝るのは、毎朝の様に来訪してくるハルカのために、鍵を開けて出迎えるのが面倒だからだ。

だから、彼女が部屋に入ってきてても警戒しないし驚かない。別に害がある訳でもないのだから。

だが今日は少しいつもと様子が違っていた。軽く声をかけられた後に、右の頬ほおに柔らかい感触を感じた　キスだ、と判った。

だが、それ以上なにかする素振りを見せない。

だから眠たい目を開いて状況を確認しようとした。

そこには

「……なんで泣いてるんだ？」

楠瀬ハル力は泣いていた。

自分の身を自分でかき抱く様にして、泣いていた。

「え？ あれ、わたし……どうして……？」

気付いていなかったのだろう。自分の頬を伝う涙に驚きながら、彼女は嗚咽おえつするのを止められない。止めようとすればするほど涙が溢れてくる。

「ごめんなさい、わたし」

そう言って立ち上がろうとするハル力の腕をアサトは掴んだ。ここで離してはいけない気がしたから。

そう強い力で引つ張ったつもりはなかったのだが、ハル力は引かれるままにアサトの上に倒れ込んだ。そのまま彼はぎゅっと彼女を抱きしめた。

軽い。そして柔らかい。と感じた。

「アサト……？」

ハル力が呆けた様に口にする。

「……俺が悪いんだろ？俺がお前の好意に甘えてばかりで応えなから」

ハル力が自分に好意を持っているのは知っていた。気付かない方

が阿呆だ。^{あほう} そのくらいハルカのアサトに対するアプローチはストリートだった。

だが、最後の一線で引いているというか、遠慮している処が彼女にはあった。

その理由をアサトは知っている。

密着している今だから判る。ハルカのスカートの中　その太ももの間にあたる部分に不自然な膨^{ふく}らみがある。

そう、楠瀬ハルカは男である。

外見はどう見ても女性だ。それこそ裸にでもしなければ、彼女正確には『彼』　が男だと思ふ者はいまい。

先天的なホルモンのバランスの異常で女性的な外見をしているが、生物学的には間違いなく男性なのである。

だが、ハルカは物心がつく頃には女性として振舞っていた。精神が身体に引つ張られた結果なのか、魂の部分で女性だったからなのかは判らない。

いずれにせよ、彼女は女性として二十二年間生きてきたのだ。

その生き様は変えられないし、変えるつもりもない。

アサトはハルカと出逢って早々にその事実を知った。その上で彼女と付き合ってきたのだ。

だが

「おかしいですね。もう割り切ったつもりだったのに……」

泣きながら笑おうとするハルカの姿が痛々しくて。

「こんなことであなたを困らせたくないのに……」

その泣き顔が愛おしくて。

「わたし、わたしは……ん　　!？」

だから　アサトはハルカの唇に自分のそれを重ねて、口を塞いだ。

これ以上、彼女に悲しい言葉を言わせたくなくて。

これ以上、彼女の自虐的な言葉を聞きたくなくて。

静寂が満ちる。

どちらからともなく舌を絡め、むさぼるように互いに互いを求めあつた。

「……………ん……………はあっ」

やがて酸素を求めて口づけが中断された。

呼吸を整えてもう一度、今度は軽くキスを交わす。

「アサト……」

顔を上気させ、潤んだ瞳でハル力が言外に訴えかけてくる。

『わたしでいいの』と。

答えはもう決まっている。

「男か女かなんて些細な事だ。俺が好きになつたのがたまたまお前だった、それだけだろう？ それに」

右手をハル力の下腹部に伸ばし、スカートの下のショーツに手をかける。彼女の股間の屹立したモノに優しく触れる。

「あんっ ア、アサト……あの、恥ずかしい……ですよ」

「コレだって、お前の一部なら愛おしく思える。人を想うのに、それ以上理由が必要か？」

「……気障な台詞 似合わない、ですよ？」

ようやく普段の微笑を浮かべて、表情を崩すハル力。

「判ってるよ。出血大サービスだ」

「サービス・タイムはもう終わりですか？」

いたずらっ子のような笑みに妖艶な表情を滲ませ、彼女が両腕をアサトの首に回してきた。

「いや　これからだ」

ハルカを押し倒す様に体勢を変え、彼女の顔を正面から見つめる。その表情からは、この先の期待と少しの不安が窺える。

「優しく……してくださいね」

ハルカの瞳が閉じられる。もう、ためらう理由はなかった。

時刻はとうに正午を過ぎ、けたる気怠い昼下がりと呼ぶに相應しい時間となっていた。

「あなたを起こしに来て一緒に寝ていたら、本末転倒ですね」

乱れた着衣のまま、アサトと同じシートに包くるまったハルカが可笑しそうに言った。

「今日はもう休みだ」

「アサト、まるっきりダメ人間の発言ですよ？」

ため息を吐きながら、それでも満ち足りたようにアサトの横顔を見つめる。

「んふふふ」

猫が飼い主にじゃれつくように、彼の胸に顔をすり寄せるハルカ。
アサトは無言で彼女の髪を撫^なでた。

誰もが望むようには生きられない。

誰もが様々な悩みや痛み、苦しみを抱えて生きている。

この理不尽な世界で生きていくのは容易な事ではない。

だから人は他者を求める。足りないものを補い合い、共に歩むために。

傷つけられるかもしれない他者の恐怖に脅^{おび}えながら、それでも誰かと繋がっていたいと望むジレンマを抱えている。

だからハルカはこう思う。幸せとは、自分の存在を受け入れ、共に歩んでくれる誰かの存在。その誰かと共に在^ある事だと。

だから

「アサト……わたし、今、幸せです。この時間がずっと続けばいい
と思っています。もし、あなたも同じ気持ちでいてくれるのなら」

変わらないものなんてない。永遠なんてない。それでも、この想

いが叶うのなら……。

「好きでいてもいいですか？」

顔はアサトの胸に埋めたまま、彼の答えを待った。

沈黙が怖かった。次に来るのが拒絶の言葉ではないかと思うと、彼の顔が見られなかった。自分の鼓動の音と、すぐ近くから聴こえる彼の鼓動の音だけがハルカの意識を支配する。

どれくらいそうしていたか、ハルカにとっては無限にも等しい静寂が流れ 気付くとアサトに抱きしめられていた。

「ああ」

それが彼の肯定の言葉だと理解するのにハルカは数秒の時間を要した。

アサトの言葉が胸のうちにじんわりと浸透していく。たったひとこと。味もそっけもない、けど明快な了承の意思表示。

自分を受け入れてくれた。

自分と共に在ってくれと

「アサト 大好きです」

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187q/>

ヒメゴト

2011年1月23日10時26分発行